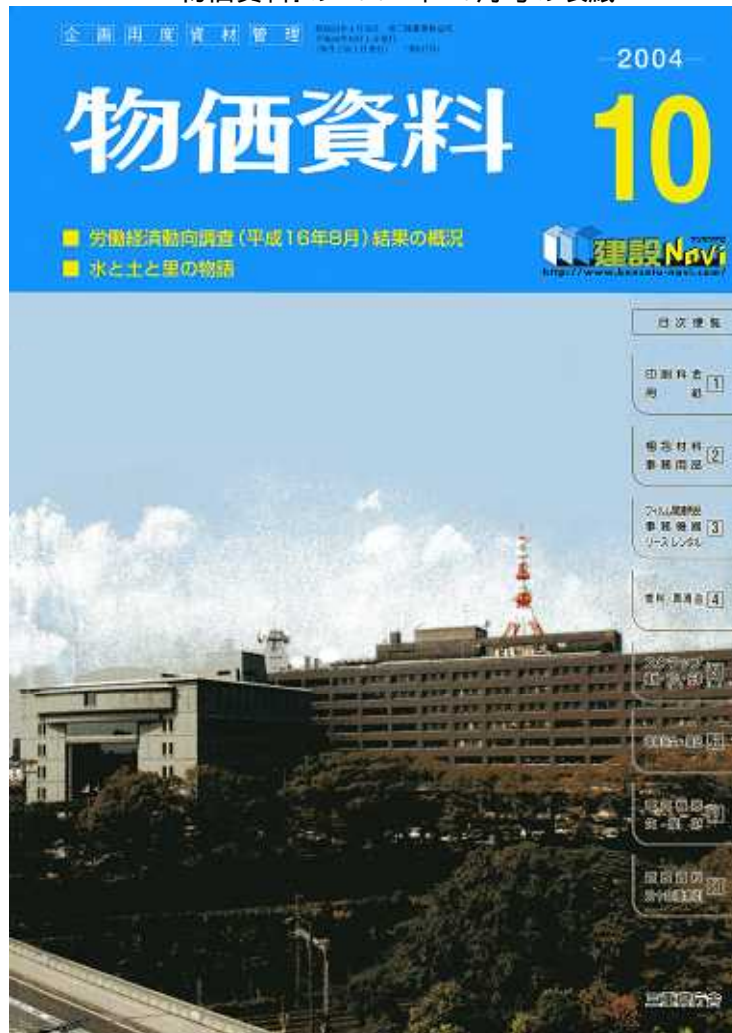


水と土と里の物語

財団法人建設物価調査会発行の
「物価資料」の2004年10月号の表紙



これは、財団法人建設物価調査会発行の「物価資料」の2004年10月号から2005年2月号までの4回に分けて掲載されたものを一冊に編集したものです。

内容は、足利EM普及探偵団の誕生から、現在のNPO法人足利水土里探偵団までの流れや活動内容について「水と土と里の物語」のタイトルでまとめたものになっています。

尚、初号の掲載がタイトルと内容を見て、土・水・里について詳しくシリーズで掲載することになった経緯があります。

発行にあたって、筆者である中庭氏のご苦勞と財団法人建設物価調査会様の掲載への呼びかけに感謝し、また、会員相互の発展のため発行させていただきました。

この編集はB-5(原本)からA-4サイズに拡大しています。

2005.2

NPO法人足利水土里探偵団

目 次

水と土と里の物語(1)……………1

「物価資料」2004.10月号掲載分

足利市のこと
商工会議所の支援で活動体が誕生
家庭の生ごみ堆肥化から
学校教育分野へ
学校のプールから市内の河川へ
世界水フォーラムで発表
学校から地域へ
足利水土里探偵団の歩み

水と土と里の物語(2)……………6

「物価資料」2004.11月号掲載分

水と循環
台所からの環境革命
環境学習と川
川は流れる
世界水フォーラムで発表した反響

水と土と里の物語(3)……………10

「物価資料」2004.12月号掲載分

はじめに
家庭菜園での微生物との出会い
環境問題へ
循環型社会づくり
験で学ぶ循環の世界
生ごみゼロの日～生ごみが花になって帰る

水と土と里の物語(4)……………14

「物価資料」2005.2月号掲載分

時代が迎えるNPO
人生修行の場
すべては出会いからはじまる
新しい活動拠点がオープン

水と土と里の物語 (1)

NPO 法人 足利^{みどり}水土里探偵団
事務局長 中庭 三夫

「物価資料」2004.10月号掲載分

足利市のこと

足利市は、関東平野のつきるところの栃木県西南端に位置し、人口 16 万 1 千余の産業と文化の都市である。市の中央には渡良瀬川が流れ、織物の街、文化の街として歴史は古、日本最古の総合大学といわれる足利学校をはじめ、足利尊氏ゆかりの屋敷跡（鏝阿寺）など幾多の重要文化財が残されている。また、古くから両崖山の山々を東山に、渡良瀬川を加茂川にそれぞれ見立て、「東の京都」と呼ばれている美しい街でもある。



商工会議所の支援で活動体が誕生

足利水土里探偵団は、平成 14 年 4 月に NPO 法人として誕生した。あしたの日本をつくる協会が主催する「ふるさとづくり賞」で栃木県最優秀賞に選ばれたことがきっかけで NPO 法人化に向かった。前身である足利 EM 普及探偵団の名前が示す通り、足利を中心にした地域に EM を普及させることで地域の環境浄化に役立てればと、渡良瀬川（市街地の中心を流れる一級河川）をきれいにしよう！の思いを集めて、平成 7 年 2 月に足利商工会議所の支援を受けて「足利 EM 普及探偵団」が誕生している。

家庭の生ごみ堆肥化から

活動のステップは、まず、主要媒体である EM（Effective - Micro - Organisms の頭文字をとっている。有用微生物群の意味）を早く多くの人に知ってもらうために、どの家庭でも毎日出る生ごみを、EM で発酵させて堆肥化にするところからスタートした。生ごみの排出が減少すれば、減少した分だけ税の負担が減る。早速、行政サイドも市民に対して EM 専用の容器に補助金制度をつくり、支援してくれた。一方、私たちの活動に対して商工会議所も事務局を引き受けてくれ、商工会議所新聞やケーブルテレビでの広報など、いろいろ

るな機関の支援もあって現在は、法人会員数12社・個人90名で構成する足利水土里探偵団になっている。

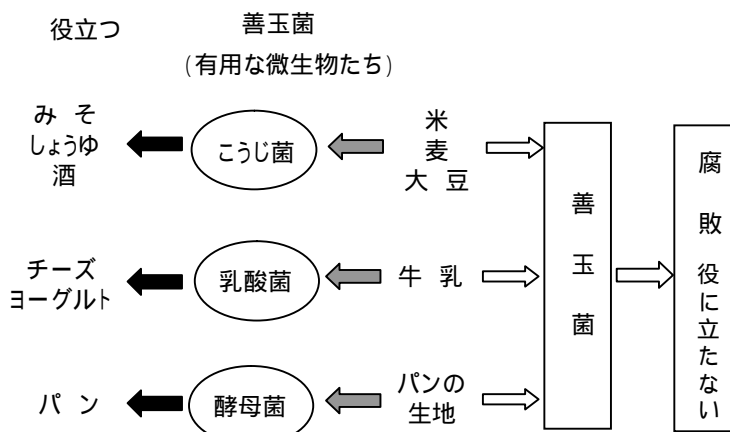
また、補助金制度や広報支援などを効果的に市民に周知させるために、小学校の空き校舎を活用して定期的で開催しているEM説明会「通称：EMサロン」も活動の基盤的な役割を果たし、定着している。こうして家庭サイドへ「台所からの環境革命」と称した普及が進んでいる。

環境問題については改めて言うまでもないが、水・土・空気の汚染が進み、環境に影響する現象が多くなったために、これらの問題解決が叫ばれている。だが、5科10属80種の有用な働きをする微生物の集まりであるEMには、このいずれにも身近で具体的で簡単で、しかも廉価で取り組みができる事例が数多くあるのだ。

物質文明を象徴する21世紀づくりに奔走した世代は、清流に遊ぶ小魚の姿を失ったが、多くの人々がそれを取り戻そうといろいろな角度からの動きをはじめた。それは次の世代に対する責任の行動へと

EMとは？ EM=有用微生物群

Effective - Micro - Organismsの頭文字
人間にとって有用な働きをする微生物



移る。

仏教詩人・坂村真民さんの「あとからくる者のために」という詩がある。

あとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
皆それぞれ自分にできる
何かをしていくのだ

「あとからくる者のために」の一節より。

学校教育分野へ

こうして、私たちの活動のステップは学校教育分野へと進んでいく。おりしも、総合的な学習の時間の導入を控えて、取り組みテーマの模索をしている学校側の事情とかみ合う時期でもあった。

学校給食の食べ残しをEM発酵させた堆肥でケナフを育てる提案には全面的に賛成してくれた。足利市立毛野小学校大久保分校は、EMを活用したさまざまな学習を「足利ケナフ物語」のビデオにまとめることとなり、全国にもたくさん紹介された。

これを期に足利市では公立の全小中学校の総合学習にEMとケナフが推奨された。卒業証書もケナフの和紙に変わり、専用のケースができると長年馴染んだ筒式ケースの文化が消えた。なぜコストの高い和紙なのか。21世紀は環境と教育の世紀だといわれる中、その意味を足利市が子供に贈るメッセージとして、敢えて形を変えた卒業証書に託したのだ。

環境学習で取り組んだ事例の中に、米のとぎ汁のEM発酵液によるプールの浄化と、ビオトープ実験がある。プール掃除の時には100匹入れたメダカが1000匹以上に増えたばかりか、水面のアメンボ、入れもしないヤゴ・ゲンゴロウをはじめたくさんの生き物を目にした子供たちの歓声は、今でも耳に残っている。

家庭の汚染も、工場の汚染も、農地の汚染もすべては水に混ざって排水路から河川に流れて海に注いでいるのだ。

学校のプールから市内の河川へ

さて、私たちの活動はプールの実験を経て川の浄化への取り組みにステップが移った。産学民での取り組みをコンセプトにした「矢場川浄化作戦」を経験して、平成14年から、沿線の幼・小・中・大学と家庭と地域で取り組むことをコンセプトにして「彦谷川ビオト



EM発酵液によるプール浄化

ープ作戦」と名づけ、足利市立葉鹿小学校が中心となって取り組んだ。理科が得意な先生のリードでEMを組み入れた総合学習が広く展開された。たとえば、生ごみについては「生ごみゼロの日」をつくり、各家庭から生ごみを学校に持ってこさせEMで発酵させる。できた堆肥で花の苗を育てて家庭に持ち帰らせる。生ごみを花に代えて返すことで家庭と学

校の循環役に仕立てている。

米のとぎ汁も学校に持参させて理科室で発酵させ、彦谷川の3カ所に定期的に総合学習として放流している。放流を始めた昨年からはホタルが、2年目には川底からシジミが出てきたと話題になっている。こうした成果は葉鹿小をはじめ、流域の幼稚園がEM泥ダンゴづくりを担当して参加したり、大学で大きなビオトープの池を開放して提供。児童が作った米のとぎ汁発酵液を高齢者施設に使ってもらうために提供したりと狙い通り、学校内の動きから地域へと着実に浸透した動きになってきている。

世界水フォーラムで発表

特に葉鹿小のこうした活動は、各方面からの注目を集め県内は勿論のこと、全国にも紹介されるようになった。また、昨年3月に関西で開催された第3回世界水フォーラムの京都国際会館（同時通訳）での発表は、6年生男女3人ずつが貴重な体験をして小学生最後の思い出でとし、結ぶことができた。

今年からは、新たなメンバーでエコクラブとして活動が継続し新しいアイテムにも挑戦している。中でもEM廃油石鹸づくりは、大きな広がりを見せている。

学校から地域へ

こうして足利地域における環境学習の事例は、ケーブルテレビや新聞で紹介される頻度も増している。足尾鉍毒事件でも有名な渡良瀬川の浄化と学校での環境学習とを結びつけ



るサポートができたことに、この活動の意義と喜びを感じている。

さらには、川と学校だけでなく地域社会への広がり。まさに「産・官・学・民」をつないだ多くの出会いと発見に始まり、感動や癒しの場面まで、

目には見えない微生物が演じてくれている大きな力を実感している。

現場学習で学んだ児童から手紙をもらうことがある。感動したと書いてある子供は必ず、「これから私は何をどこで やります！」と見たこと聞いたことを実践すると宣言してくる。感動しない子供はただのお礼だけの手紙になっている。人は感動した受け止め方をしないと新たな行動を起こすことにはならないようだ。

子供の行動には素直に従う大人。そこから新しい社会が少しずつ動く。こうしたボランティア活動、とりわけ子供たちとのかかわりから多くを学ぶ。循環型社会づくりの必要性の一端を、未来を生きる子供たちが、自ら訴えている行動にさえ見える。

コラボレーション（協働）という言葉が流行っているが、世代間を結んだ社会構造の大切さ、それらを構成するそれぞれの機関が未来を生きる世代に対していかに行動するか。NPO 法人の役割の一端もその辺にあると思っている。

次回より活動内容を、具体例を取り上げて紹介していく。

足利水土里探偵団の歩み

平成 6 年「EM で渡良瀬川をきれいに・・・」をめざして、EM による環境浄化の可能性を市民や市の幹部に説明してまわる

平成 7 年「足利 EM 普及探偵団」発足
台所（生ごみ中心）からの普及
足利市もバックアップ生ごみバケツに補助金制度

平成 11 年 市内 38 の全小中学校が EM とケナフの環境教育へ

平成 12 年 葉鹿小学校が全国 EM 環境学習コンテストで優秀賞を受賞

平成 13 年 7 月 ふるさとづくり賞
栃木県最優秀賞受賞

平成 14 年 4 月 1 日
NPO 法人「足利水土里探偵団」に

平成 15 年 3 月葉鹿小学校の EM 環境学習活動を世界水フォーラム(京都)で発表

平成 15 年 足利市よりリサイクル・エコシヨップに認定される

平成 16 年 栃木県河川愛護会総会で EM による河川浄化活動について講演

平成 16 年 4 月 EM サロンに環境学習コーナーを開設



下野新聞 2001年(平成13年)2月21日

ケナフ使い卒業証書
全小中学校に足利市教委

【足利】市教委は、三月 証書を贈ることにしたい。卒業式で、市立小中学校の卒業生三千三百四十人にケナフ入り卒業証書は愛媛県内の業者が作ったものに対し、環境に優しいとされるケナフを使用した卒業証書でケナフ七割、古紙三割の書を送ることにしている。通常はケナフの卒業証書に比べ厚く、表面はさらさらした手触りとなり、環境教育実践活動推進事業の一環として、ケナフ栽培を奨励している。小中学校で栽培する案もあったが、証書を製作する分量には足りないため、愛媛県内のケナフがどのように役立っているのかに感じていた。そのため、ケナフ入りの通常の卒業証書が一枚約二千百円なのに対し、ケナフ入りのものは約三百円となり割高となるが、市教委は「子供たちの環境問題に対する意識付けになれば」と話している。市教委は今年度以降もケナフ入り卒業証書の贈呈を行うほか、今後は実際に子供たちが栽培したケナフを証書に使用することも考えているとしている。

水と土と里の物語 (2)

NPO 法人 足利^{みどり}水土里探偵団
事務局長 中庭 三夫

「物価資料」2004.11 月号掲載分

水と循環

生命の営みは、水の中で行われていると言っても過言ではないだろう。人間（成人）の体の3分の2は水分からなり、生命活動をするためには1日約2.5リットルの水が必要だと言われている。生命の源とも言える水は、地球の生態系の中で大きく循環し、自然を潤す役割をあらゆる場面で果たしている。このサイクルのある部分で汚染が進めば、バケツの水に赤インクを垂らしたが如く、全体に悪影響が及ぶ。自分たちが、日ごろ使用している水道の蛇口から出る水も、排水路を伝い、河川から海に流れ込む。地上の汚染は海に注いで太陽熱で蒸発し、雨となって自分たちの家庭に蛇口を経て戻って来るのである。地球上に生きる人間は、水によってつながり、運命をともにしている。水の浄化は人類共通の最重要課題である。

環境問題を京都議定書のような大規模なものと捉えようと、個人ではとても関わることができなくなってしまう。私たちは、EM（有用微生物群）という身近な微生物で、いろいろな切り口から環境問題に取り組める体験をしてきた。そこで今回は「水」と関わりのある活動、河川の浄化活動から学んだ、身近で手軽な取り組みを紹介しよう。

台所からの環境革命

渡良瀬川（足利市の中心部を流れる川）をEMできれいにしよう！の合言葉で私たちの活動がスタートした。川幅200mもある規模の河川をボランティア活動できれいにとは無茶な話である。台所からは毎日たくさんの有機物の残溢がでる。それらの多くが台所の排水口から地域の排水路を伝い、川に流れ込むのである。

「できることを・できるひが・できるときに」が活動

原料

- ・米のとぎ汁（各家庭）
- ・EM活性液（水土里探偵団）
- ・栗シロップ（足利うまいもの会）



EM醗酵液

活用

- ・風呂や洗濯に使用
 - ↳ 下水道の浄化
- ・河川に投入
 - ↳ 臭気、ヘドロが減少



米のとぎ汁を使ったEM活性液

モットー。まず、誰でもできる、台所から流す水の浄化方法の普及活動を始めた。

生ゴミは、ひと手間かけEMで発酵させて堆肥にする。ここから、ガーデニングや家庭菜園運動の輪が広がっている。

また、米のとぎ汁は同じくEMで発酵液にし、浄化液・活性液として活用する。それを風呂や洗濯に使うことで浄化できる水を流すことになる。栄養素のあるものはそのまま流すと悪玉菌の餌になり「臭い・汚い」の世界に向かう。発酵の世界は善玉菌の働きが強いから「いい匂い・きれい」の世界が広がる。台所から出る有機

葉鹿小エコクラブが作り、足利水土里探偵団が販売している廃油石けん



の廃棄物は新鮮な段階で発酵の世界に導いてやるのが大切である。

最近では、家庭の廃油を集めて、EMで発酵させてから石鹸もつくっている。この石鹸はアトピーなどにも良く、排水は浄化役にもなるとか葉鹿小学校のエコクラブが様々な実験研究をしている。環境にもやさしいこの広がり、家庭だけでなく、市内の飲食業等をも視野に入れた、足利商工会議所女性会の活動に結びついて展開されつつある。

環境学習と川

足利市では、平成10年から環境学習にEMとケナフを推奨してきた。平成14年から本格的に導入された「総合的な学習の時間」を睨んでのことであった。

この、学校とボランティアとのコラボレーション活動は、私たちが学校との関わり方を学ぶ良い機会にもなった。教育委員会と学校、学校の中、学校とPTA……、それらの仕組みと関係を学ぶ中から、ボランティアの自分たちがどのように関わればよいのか。また、支援活動を進めるうえで、その前にいろいろなことを学ぶ必要があったことにも気付かされた。

こうして、お互いの「立場と役割」を心がけた協働から、いくつかの実績もつくることのできた。冬場のプールをビオトープ（内容は前号で紹介済）にした体験から、我々も実際の河川浄化に向かう決心ができたのである。

川は流れる

「川は流れる」という題名の歌がある。川は流れるのではなくて、川に水が流れるのではないか？

この歌を聞くたびにそう思っていた。

さて、産・学・官・民協同で取り組んだ「矢場川浄化作戦」のコンセプトが幕張メッセで展示され、ご覧になった堂本千

葉県知事の指示で、水質担当部長が早速足利へ視察に来られた。案内した折に「上流が浄化してくれると助かります」と、最下流部で水質担当をしている部長さんの実感のこもったコメントが印象に残っている。陸上のすべての汚染が、雨などに洗われて排水路から川に集まり海に注ぐ。高いところから低いところに向かって流れる。最下流域に当る千葉県はなるほど大変であろう。

ここで、私たちの河川浄化活動のパターンを紹介する。川の沿線の幼稚園から大学まで



取れたシジミ

が連携して河川浄化に取り組んだ「彦谷川ビオトープ作戦」の事例。リーダー役は小学校。総合学習の活動から、現在はエコクラブとして構成された児童が中心的な役割で展開し、主役の子供たちの動きに動かされる大人。こうして地域が結びつき動く。

浄化活動を続けているうちにシジミが発生。歓声が上がり各地から見学者がやって来る。その手応えがまた新たなエネルギーと

なるのである。

上流の産業廃棄物の清掃（4トン車に2台分）も子供たちの行動から始まり、大人が加わった。

川はつながっている。上流からの浄化の大切さについても子供に背中を押された恰好だ。

こうして子供たちは、川の浄化活動の体験を通して、生物が繁殖できる環境を改めて知ることができたと思う。子供の動きには社会の目も集まる。人の集いも大きくな、川が、子供が、地域が豊かなコミュニティーづくりを促すかのようでなんと嬉しい。



シジミとりをする子供たち

世界水フォーラムで発表した反響

葉鹿小学校を中心とした活動は、昨年3月に第3回世界水フォーラムで、男女の児童3人ずつが発表を行い、多くの反響が寄せられている。発表当時6年生だった児童も今は中学生。先日、小学校でその発表者に会ったが、堂々たる中学生に成長していた。先輩の周りには、後輩であるエコクラブのメンバーたちが歩み寄っていた。

今年のエコクラブのメンバーも、全国から事例紹介の要請があり超多忙。表彰もスパイラル状にレベルアップして、数も増えている。

足利市には背後にある山並みから16本の幹線的な河川が渡良瀬川に流れ込んでいる。各々の川が汚染源の家庭雑排水でなく、いずれシジミが出てくるような河川になれば、渡良瀬川は自然にきれいになるのであろう。「彦谷川ピオトープ作戦」の事例を、そのまま各地域に展開できればと思っている。

京都国際会議場



会館内で発表を待つ葉鹿小の児童



悪臭のクレームが多く行政を悩ます排水路の浄化。ヘドロの堆積量も減った(半年で半減)と行政からの評価をいただき、今年から更に活動領域が広がった。これも誰にでも取り組める事例に育てられればと思

っている。

童謡「ふるさと」に代表される歌詞の世界を知る世代も少なくなっている。身近な自然界に生き物たちが本当に少なくなっている。まさに、これが『沈黙の春(レイチェル・カーソン著)』の現象なのか。すべての自然が子供のころの遊び場だった我々世代は、活動を通して改めてかつての自然とのギャップを認識させられている。

さる、6月に我々の活動が新聞の全国版で紹介され、全国からたくさんの問い合わせがあった。学校と子供と河川浄化に関心が多いようだ。排水路の悪臭問題も悩みが多いようだ。身近で手軽に、個人でできる河川浄化の具体的な行動の普及活動。その活動が少しでも参考になって、水路から河川へ、そして海へとつながればと思っている。

水と土と里の物語 (3)

NPO 法人 足利水^{みどり}土里探偵団
事務局長 中庭 三夫

「物価資料」2004.12月号掲載分

土について

土という漢字は、下の横線が大地を表し、十字の部分は大地の中の種が芽を出して、双葉を開いたところだと辞書にある。漢字は自然の観察から生まれているものが多く、その分、親しみもあり意味深い。

普段漠然と土という言葉を使っているが、砂漠のような土地を見ても“土がある”とは言わず、“砂がある”と言うように、草が生えていたり、植物が育っているところを土と呼び分けている。

では、植物が育つ土とはどんな土か。まず、岩石が風化や水の侵蝕などで壊され粉々になった母材に、動植物の排泄物や死骸、腐食など有機物が混じり合い、さらにそれをエサとするミミズやダニ・微生物など土壌生物が生きているもの、これを私たちは通常「土」と呼んでいる。

家庭菜園での微生物との出会い

私の家と道路を挟んで、2年間無耕作の2ヘクタールほどの畑があった。夏場には老夫婦が除草剤を散布していたが、気になっていたので思い切って「私に草取りをさせてください。野菜も作らせてもらえないだろうか」と尋ねた。「倅がサラリーマンでやらないから、あんたが責任もってくれるならいいよ。木などは植えないこと、地主の都合で引き上げるときは3カ月以上前に言うなどいくつかの約束をして、12名で菜園をスタートした。

この家庭菜園「草取り応援団」は、菜園希望者と畑を使ってほしいという地主さんとの組み合わせが広がり、今では70名のメンバーになって、昨年20周年記念事業を行った。

野菜づくりも年々うまくなっていたが、連作障害に悩まされた。「土作りと言われるが、



土は人間には作れないのだから、それは騎った言い方だ。育土というのだ。土を育てるのだ。」と説いた本に出会った。複数の微生物(有用微生物群 = EM・10月号で解説)で土壌改良を進める琉球大学の比嘉照夫教授が書いたその本には、土は微生物の棲家で、元気な土とは元気でよい働きをする微生物が土壌を良くするのだとあった。EMとの出会いである。

環境問題へ

しばらくして、EMに水・土・空気を浄化する働きがあることを知り、環境問題に対して具体的に取組める素材であることもわかった。

私はまだ現役のサラリーマンであったが、少しずつその動きが見え始めたころ、足利商工会議所から組織の発足と運営を勧められ、探偵団が誕生した。

行政もEMによる家庭で生ゴミ堆肥化できる容器に補助金制度を導入して支援してくれた。ボランティアの主婦・行政・商工会議所、いずれも今までの仕事では縁の少ない皆さんとの出会いだった。

循環型社会づくり

生きている土は、地上における生物と深く関わっている。太陽からのエネルギーと土の養分で植物が育ち、人間を含めた動物や植物が生命を終えて、また土に戻って行き、土壌生物に分解されることで土の養分となる。

土がなければ生命の営み、物質の循環が途絶えてしまう。まさに土は多くの命を育てている生命の源。母なる大地の所以である。

私たちは「やれることを・やれるひとが・やれるときに」を活動のモットーとしてきた。任意の活動だからこう言わざるを得ないが、環境問題の現状を考えればこんな悠長なことは言っていられないのが本音である。循環型社会づくりが叫ばれ、真剣に取り組む行政も増えてきた。スローガンのなものから、実際に目に見える形にした取組みが目立ってきた。

毎日食べるご馳走もテーブルの上にあるまではご馳走だが、食べ残されたものは生ゴミとして厄介ものとなる。ご馳走と生ゴミは紙一重だ。飽食の時代といわれる現在の状態がいつまで続くのか心配も絶えないが、自分で種を蒔き育てた食材には自然と感謝の気持ちも生まれるものだ。



足利クリーンアップフェアに参加する葉鹿小の児童

体験で学ぶ循環の世界

この自然界の循環の意味や大切さを是非、次世代の子供たちに体験を通して身に付けてほしい。話や本、映像で見ても解説を聞いても理解できる世界ではないと思うからだ。

足利市は6年前からEM(有用微生物群)を環境学習の素材に推奨してきた。各学校は様々な個性的な取り組みをしているが、ここでは児童の家庭の生ごみを学校で堆肥化して花の苗を持ち帰らせる活動(学習)を紹介する。

生ごみゼロの日～生ごみが花になって帰る

足利市立葉鹿小学校の事例である。

毎月1回、児童が登校するときに、自分の家から生ごみを持参する。専用の容器に入れてEMぼかしを振りかけて発酵させる。発酵した生ごみを学校の菜園で土に戻す。大量にできた堆肥で花の苗を育てる。育てた苗は全員の家庭に持参させる。生ごみが花の苗になって戻って行く。児童と学校と家庭、生ごみと土と花、多くのコラボレーションが育まれる世界が展開する。花の苗は人気が高く地域のいろいろなイベントでも販売されるようになっていく。

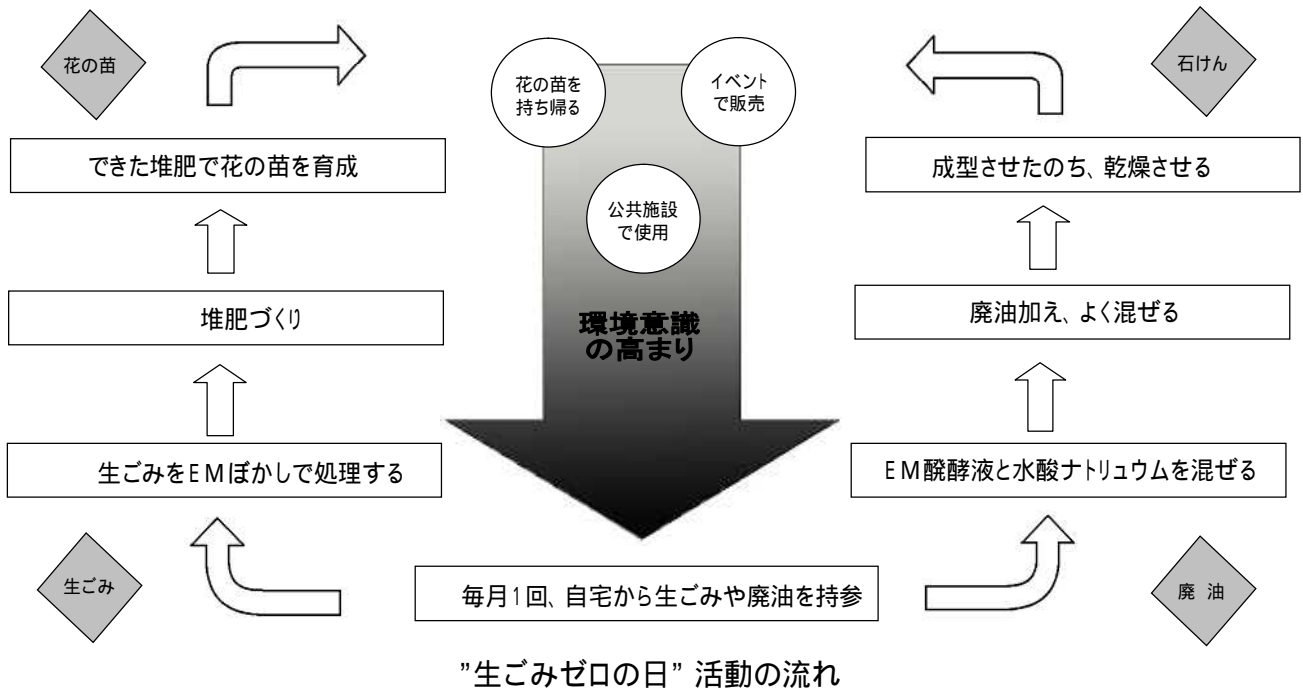
また、最近ではこの生ごみゼロの日に、家庭の食用廃油を持参して廃油石鹸づくりにも取り組んでいる。EMで発酵させてから製造するので、生臭いような匂いも取り除かれる。固形・プリン・液体といろいろな石鹸をエコクラブの児童が担当してつくる。とても汚れ落ちが良くアトピーの方にも安心と評判だ。ハーブの香りをつけて市役所や教育委員会など公的な施設で使ってもらうために大量に仕込んでいる。

生ごみや廃油、前号で紹介した米のとぎ汁など、いずれも自然界を汚染させる厄介ものである。しかし、いずれも発酵という世界に導くことで役に立つ資源になることを子供たちは体験的に自分のものにしてきたことと思う。この事例をホテル・レストラン・飲食業など広く社会に普及させる役割を大人世代が実行することが、大切なことだろう。今、循環型社会づくりは行政でも大きなテーマになっている。複数の人がいてこそその社会。一人一人が一つ一つのものを循環させることを意識的に取り組むことで完結できる。

忙しい大人社会には子供からの発信が一番素直に受け入れられて浸透が早いようだ。同時に、子供たちからすれば、自分たち将来の環境づくりを具体的に世の中に示して、共に行動することを呼びかけているようにもとれるのである。

葉鹿小学校の事例

(生ごみを持参して花にして持ち帰る)



水と土と里の物語（４）

NPO 法人 足利^{みどり}水土里探偵団
事務局長 中庭 三夫

「物価資料」2005.2月号掲載分

里について

前回までに足利水土里探偵団の水と土との関わりと具体的な活動内容を紹介してきた。最終回の今回は「里」についてお話ししよう。

私たちはEM（有用微生物群）を活用し、環境問題に対して、誰でも手軽で簡単に取り組める実践事例を紹介してきた。ポイントやコツなども「EMサロン」と称する説明会を定期的開催しながら啓蒙活動に努めている。「台所からの環境革命」をキャッチフレーズとした生ごみの堆肥化による野菜や花づくりの事例紹介では、当然のように主婦の取り組みが多かった。その後、環境問題を次世代の子供たちにも是非知ってもらおうと学校に紹介していると、総合学習に取り組む気運が高まる流れとあいまって、この協働活動から全国に発信できる環境学習の事例もつくることができた。

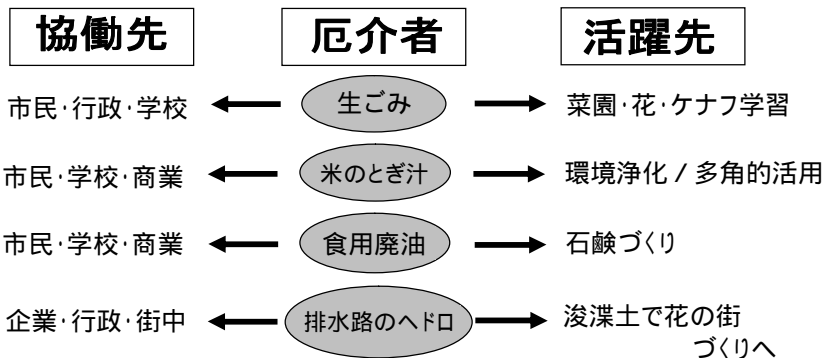
また、主な活動の1つである河川浄化についても、いくつかの河川に取り組んでいる。家庭の生ごみ堆肥づくりからは、家庭菜園「愛称：愛菜園」運動の広がりになっている。

こうした活動が10年の節目を迎えた。そして昨年12月に

栃木県と足利市の支援を受けて、今までの足利商工会議所の居候的な事務所から旧書店ビルを改装して、街の活性化の役割を担う新しい活動拠点としてスタートした。

厄介ものの活躍と行き先

足利水土里探偵団の活躍事例から



時代が迎える NPO

時代の課題を発見し、同じ思いを持った人たちが集まって、行政や企業とは異なった立場から問題解決にあたる新しいサービスの担い手としてNPOが登場してきた。価値観の多様化と共に、市民の担い手であるという新しい公共性の考え方が各地に根付く必要性が、今の社会の中にあるのかもしれない。

そうした流れに押されるように平成14年4月に水土里探偵団もNPO法人になった。私たちの協働相手は、市民をはじめ学校・大学・企業・商店・行政・商工会議所と多岐にわたっている。「瞬間最適 未来最適」、「部分最適 全体最適」を心がけながら、取り組んでき

た流れを振り返ると結果的にそのようになっていたのである。ボランティアの立場からの提案をそれぞれが受け入れてくれたから実現したわけだ。右肩上がりの経済状況の時代には難しかったろう。まさに時代が迎えてくれたことを実感する。

人生修行の場

「私が自分のために仕事をしていたときには、私のために働いてくれたのは自分だけだったが、他人のために働くようになってからは、他人もまた私のために働いてくれた〔ベンジャミン・フランクリン〕」。現役時もそうであったが、特にリタイア後における人生の選択肢ともいえる 1 つの言葉になった。先人の言葉には重みがあり、いずこの言葉もなぞるように確かめると実感として納得できるケースがきつと多いのだろう。

「つまりいたっていいじゃないか、にんげんだもの〔相田みつを〕」。これも順風満帆の時にはわからず、大きな壁に突き当たり挫折と絶望感を経験してはじめて実感し、納得できる言葉として浸透されるのだろうか。

すべては出会いからはじまる

家の前の畑で夫婦が、「もう倅も畑をしなから」と除草剤をまいていたのをみて、家庭菜園を思いついた。そして、連作障害の経験から微生物、EM との出会いにつながった。この EM が土の活性化だけでなく水・土・空気の浄化にも役立つことを知り、環境問題の解決に結びつけた活動を思い立った。そこで商工会議所のサポートがあり、たくさんの人と巡り会いが続いている。企業人間の時代とは異なる、思いの繋がった人たちとの出会いである。

新しい出会いからは、たくさんのことを学ぶと同時に新たな自分発見の機会となり、新鮮味のある人生づくりにもなっているように思う。

新しい活動拠点がオープン

去る、平成 16 年 12 月 12 日足利水土里探偵団の店舗 & 事務所がオープンした。通称：eco - SALON ビル。数年前まで使用していた書店を改装し、栃木県と足利市より「中央商店街空き店舗活用対策支援事業」の支援を受けたもので、街の活性化の一翼を担うことになる。



新しい建物はビル4階全部使用可能だが、改装したのは1階だけ。床面積22坪余のフロアは自在式の間仕切りで中央で仕切れるようになっており、店舗とサロンスペースとして使用できる。サロンスペースはEM活用講習会や活動事例の紹介や発表、特に小学生を中心とした環境学習のパネル展示や発表会などに大いに活用してほしいと思っている。子供たちの元気な発表からはたくさんの元気をもらっている。

新しいサロンでは、さらに楽しいコラボレーションが期待できそうである。

ほかにも、私たちが今まで取り組んできた事例から、この街中に提案できるものを考えている。例えば排水路規模の浄化活動からの提案だ。ヘドロの減滅が進むと砂状の堆積が残る。この堆積土は浚渫したら高温で焼いてから産廃処理をするそうだが、高額な費用がかかるため、行政の限られた予算の中で少しずつ実施されている。そこで、重金属の混入などを確認した上で、浚渫した土を微生物処理しながら有機物を風化させる。砂状になったころ生ごみ堆肥で花づくりに適した土にして、街中の花づくり運動に役立ててはどうかと考えている。郊外の厄介ものを街中で役立てる。循環型社会づくりの実践事例の1つとして、街中に活動拠点が移ったのを契機に是非提案してみたい。

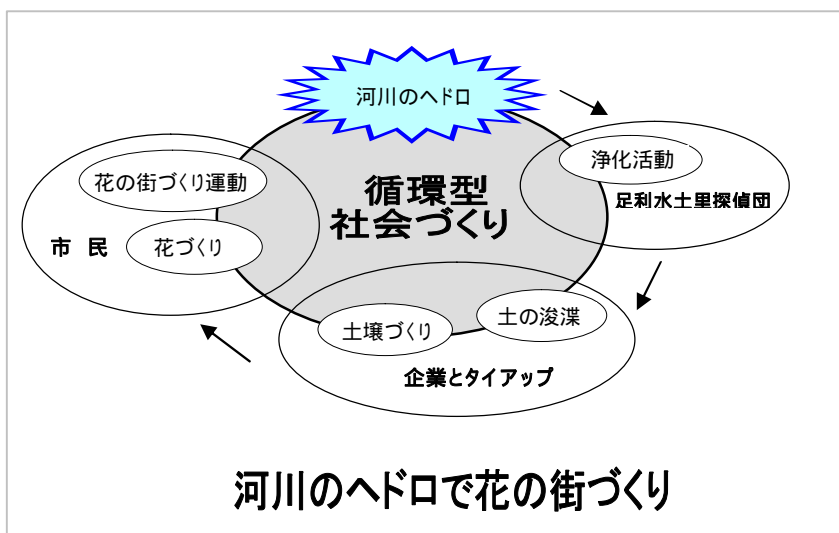
生ごみや廃油、前号で紹介した米のとぎ汁など、いずれも自然界を汚染させる厄介ものである。しかし、いずれも発酵という世界に導くことで役に立つ資源になることを子供たちは体験的に自分のものとして様々な活用を身に着けたと思う。これらの事例を広く社会に普及させることが大人世代の大切な役割となる。

今、循環型社会づくりは大きなテーマ。複数の人がいての社会。一人一人が一つ一つのものを循環させることに取り組むことで完結できる。

スローライフなど言葉では理解しても、こうした煩わしい話は、忙しい大人社会には、大人からよりも子供からの発信が一番素直に受け入れられて浸透が早いようだ。同時に子供たちからすれば、自分たち将来の環境づくりを具体的に世の中に示して、共に行動することを呼びかけているよ

うにもとれるのである。次世代を担い生きる子供たちに、自然が元気で人間も元気に生きられることを体験的に知ってもらうこと。そして、すべては循環の中で存在していることを知ってもらうこと。と言いながら私たちも大いに学ばせてもらっている。

教育とは「共育」だがというが、探偵団活動もエコサロンも「共育」の場のひとつになればと思う。



(終わり)

掲載された財団法人建設物価調査会発行「物価資料」各月号の表紙



2004・10月号



2004・11月号



2004・12月号



2005・2月号

本件に関する問合せ先

NPO法人 足利^み水^り土^り里^り探偵団
〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2621-1
エコ・サロンビル
TEL 0284-20-1220
FAX 0284-20-1221

財団法人建設物価調査会発行の
「物価資料」の2004年10月号の裏面



発行 平成17年2月 日
発行者 NPO法人 足利^{みと}水^と土里探偵団
〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2621-1
エコ・サロンビル
TEL 0284-20-1220
FAX 0284-20-1221